

芥川龍之介における異文化受容 明治開化期のイメージ

吉田 城

芥川龍之介（1892-1927）は大正期を代表する知識人であり、作家である。35歳で服毒自殺するまでの短い生涯のあいだ、数多くの小説とくに短篇小説、エッセー、アフォリズムなどを書いたが、そこには一世代前の夏目漱石、森鷗外と同じく日本・中国・欧米の文学・文化事情に通暁した国際型の作家の姿を認めることができる。芥川は欧米の作品に早くから親しんでいたが、それは主にアングロ＝サクソン系の書籍を中心にしていた。鷗外がドイツ文学を主要な糧としていたのに対し、彼はむしろ英語を通じて、世界の文学に触手を伸ばしていた。東京帝国大学英文科に在籍中に文筆活動を開始した彼は、フランス文学やロシア文学も英語訳で貪欲に読み進めていた。

芥川の虚構作品を分類するとき、通常は「鼻」「芋粥」「羅生門」「地獄変」など平安朝を舞台とした「王朝もの」、「きりしとほろ上人伝」「南京の基督」「奉教人の死」「西方の人」「邪宗門」などの「切支丹・キリスト教もの」、「蜘蛛の糸」「杜子春」「アグニの神」といった説話風の童話、「袈裟と盛遠」「或日の大石内蔵助」「玄鶴山房」など歴史の一こまを扱った時代物、身近の事象を描いた「秋」「蜜柑」「屋気楼」などの写実的作品、などに分けることが多い。そのほか保吉という作家の分身を登場させる自伝的な作品群、あるいは「河童」のような文明批評的傾向の作品群もある。本稿で取り上げたいのは、明治開化期を舞台にした「開化もの」である。じっさい、芥川における西洋文化の受容を考えようとするれば、「切支丹もの」と「開化もの」がもっとも重要であることは明白である。前者は明治後期から昭和にかけてさかんになった切支丹文化研究（北原白秋の『邪宗門』、木下空太郎の詩と文献学、新村出の研究）に連なるものと考えられ、日本が初めて本格的に西欧との接触をおこなった安土桃山時代以来の、キリスト教の伝播を主題にしている。

一方、江戸から東京へと移行する過程で、異文化の移入が奇妙な混淆文化を作りだした様子は、開化期の風俗に表れたのである。徳川家の支配期に首都として栄えた江戸は後背地として広い関東平野をもち、水陸の便のよい土地であった。最盛期には人口が130万に達し、世界最大規模を誇ったのである。明治維新後、日本の政治、経済、軍事の中心は東京にいっそう集中することになった¹⁾。

芥川龍之介は1892年(明治25年)3月1日に、牛乳製造を営む新原敏三を父として、東京市京橋区(現在の中央区)入船町に生まれた。龍之介の母が生後まもなく精神に異常を来したため、龍之介は母の実家の芥川家に引き取られ、彼は東京のなかでも江戸情緒のもっとも色濃く残る本所区(今の墨田区)の下町で育てられた。しかも芥川の家は築地外国人居留地の一画にあって、西洋から渡来した新しい文化と直接接触せざるを得ない、特別の場所であった。とはいえ文明開化の時代つまり明治初期は、芥川が物心ついたときにはすでに過去のものとなっていたことに注意する必要がある。江戸文化と西洋文化が混じり合い、せめぎあう開化の時期、ざんぎり頭でフロックコートを着た紳士と、束髪を結ってドレスを着た女性が、伝統的な姿の商人や着物姿の女と混じり合っていて、一種独特な調和を作り出していた時代はすでに終わりつつあった。本稿では明治開化期を舞台にした作品にあらわれた東京の風景を通して、都市に対する芥川の郷愁と批判的視点を検討したい。

芥川の「開化もの」には、5つの主な作品が数えられる。すなわち大正7年から12年にかけて書かれた「開化の殺人」(1918)「開化の良人」(1919)「舞踏会」(1920)「お富の貞操」(1922)「雛」大正12年(1923)である。この中から、とりわけ最初の2作品にあらわれた明治開化期の東京の姿を考察し、芥川文学における西洋文化受容の一形態を検証したい。

1 「開化の殺人」(1918)と築地居留地

この作品は、いわゆる粹小説、つまり複数の語り手が入れ子式に登場する形式をとった告白小説である。「予」という第一の語り手は、本多子爵という人物の知り合いで、子爵から「明治初期の逸事瑣談を聞かせてもらうようになった」過程で、医師北畠(仮名)が書き残した遺書を見せてもらう。この遺書が物語の本編を構成している。

北畠は有名な専門医であると同時に、文学・演劇にも通じており、しかも「西洋人も凌ぐほどの」体格をしている。つまり心身ともに西洋人に劣らない卓越した人物として想定されている。遺書が語るところによれば、彼は少年の頃から従妹の甘露寺明子を愛していたが、父親の医者仕事を引き継ぐため、21歳のときロンドンに留学することが決まった。明子に愛をうち明けることもないままイギリスに3年滞在して帰国してみると、明子はすでに銀行頭取の満村恭平と結婚していた。この失恋から立ち直るために北畠はキリスト教に救いを求め、ようやく明子に対して肉親としての愛情をいただくようになる。

ところがほどなく、北畠は満村が妻をかえりみず芸者遊びにうつつを抜かしていることを知り、義憤にかられて言葉巧みに毒薬を飲ませて彼を殺害してしまう。満村は脳出血と診断され、犯行は露見しなかった。けれども明子は相思相愛の仲であった本多子爵と結婚してしまい、北畠は再び絶望に沈む。そして今度は子爵を毒殺したいという欲望にとらえられる。このままでは二度目の殺人を冒してしまうという恐怖に駆られ、彼は遺書を残して自殺する。

築地外国人居留地

小説中で北畠が通う宣教師が住んでいるのは、作者が育ったのと同じ、築地の外国人居留地である。築地の居留地は、明治元年11月19日に現在の明石町のあたりに設立された。横浜、神戸、長崎などの居留地に比べて小規模で、港も開かれていなかったため、当初居留地としての重要性はそれほど大きくなかったが、東京湾に面し、隣接する銀座に洋風煉瓦街が作られたことによって、近代日本の表玄関として急速に発展を遂げた²⁾。もともと大名屋敷が建ち並んでいたこの地区を明治政府が整備して外国公館、教会、学校、病院などに売却したのである。ちなみに福沢諭吉は安政5年(1858)に「脱亜入欧」の見地から蘭学塾をこの場所に開いたが、居留地の整備に伴って立ち退き、芝に移転して、後の慶應義塾を創設した。豪壮な築地ホテル(当時の公文書では「外国人旅館」)は慶応4年に和洋折衷様式で建てられ、居留地のランドマークになった。設計はアメリカ人の建築家プリジェンス、工事は二代目清水喜助によって行われた。合計102もある客室には暖炉が備え付けてあり、海側にはベランダが備えられた³⁾。

居留地には各国の商社が進出したので、日本の経済発展の中心の一つとなった。芥川の父新原敏三は現在の新宿あたりに乳牛飼育場をつくり、外国人に牛乳を販売する仕事をしていた。築地居留地は、西洋文化を日本に導入するのに大きな役割を果たしたが、明治32年、外国との不平等条約（日米修好通商条約）の改正に伴って廃止されるにいたった。

留学から帰った北島は、明子への失恋を癒すために、築地居留地に住むイギリス人宣教師タウンゼントのもとに通う。明治6年のキリスト教解禁以来、居留地にはアメリカ、イギリス、フランスなどの13にもよるキリスト教会派、なかでもプロテスタント系の教会が進出し、さかんに伝道活動を繰り広げていた⁴⁾。

柳橋と新富座

「開化の殺人」のなかで、築地居留地と対照をなすのが、江戸文化の代表とも言える柳橋と新富座であろう。柳橋は現在の東京都台東区の地下鉄浅草橋近辺にあり、江戸時代から新橋と張り合う花街であった。ドクトル北島はある晩、成金の満村が隅田川に面した妓楼でらんちき騒ぎを演じているのを目撃し、明子をないがしろにするこの銀行家を殺害する計画を立てる。そして彼は新富座で、薬と称して満村に毒を飲ませる⁵⁾。新富座はもともと森田座という名前で、江戸三座のひとつ、1660年に創立された歌舞伎劇場である。十二代目座元の守田勘弥は、近代的な劇場を建てようとし、明治5年猿若町から新富町に移り、明治7年（1875）新富座と改称した。一部の観客席は椅子席であった。明治9年に焼失したが、二年後に再建された。最後に北島が自殺するのも、また新富座からの帰路のことである。満村は新興ブルジョワの典型として、銀行という近代の利殖システムを利用しつつ前近代から継承した豪華な文化を「消費」する存在である。西洋医学を身につけて帰朝した北島は、嫉妬に駆られて犯罪に走るのだが、それはまた知識や道徳でなく金の威力で文化を支配するブルジョワジーへの復讐であったと言えないだろうか。

芥川は、明子を中心とした四角関係の構図を、西洋文明と日本の伝統文化が並立する明治開化期の東京下町に設定したことで、異国情緒の濃い作品に仕立てあげた。注意して読むと、両国の「大煙火」つまり花火大会（明治11年8月3日）における「蒼然たる水靄」「万点の紅燈」「半空に仰ぎたる煙火の明滅」とか、七月の流燈会（陰曆七月の盂蘭盆^{りきょうとうえ}）

に行われる精霊会で、隅田川に灯籠を流す)とかいった、季節感をあらかずスケッチが周到に描き込まれていることが分かる。

2 「開化の良人」(1919)と明治初期の「銅版画」

この短編小説の語り手「私」は本多子爵の年若い友人で、小説家である。語り手は上野の博物館で明治初期の文明に関する展覧会に出かけ、版画を見ている子爵に出会い、昔の友人の話聞き出すという設定だ。その友人は三浦直記という名で、かつてフランスから帰国する船の中で本多が知り合った人物だ。三浦は両親から莫大な遺産を得て、仕事らしい仕事はせず、両国に贅沢な西洋風の邸宅を建て、引きこもって好きな読書にふける毎日を送っている。そして結婚については理想主義を信奉し、愛のない結婚はしないと日頃主張していた。ところが本多が任地の韓国に滞在しているとき、三浦が御用商人の娘藤井勝美と結婚したと突然知らせてくる。しばらくは幸福そうな様子であった三浦は、しだいに憂鬱そうな人間になっていく。

その原因は妻の勝美にあった。勝美は才気煥発の美人であるが、とかく悪い噂のある榎山夫人と交際しており、また従弟と称する若い青年とも不倫関係にあることが発覚する。そのうえこの青年は榎山夫人とも愛人関係にあった。三浦は妻の不品行のことをよく知りながら、耐えて黙認していたのだが、結局離婚の道を選ぶ。本多子爵がここまで話したところで博物館の閉館時刻が近づき、語り手と共に展覧会を後にする。

明治初期の風景画

この作品の評価はけっして高いとは言えない。だが芥川が男女の複雑な恋愛関係を、明治開化期の東京の風物にからませて描いた、その秀逸な手際に注目したい。この作品で芥川は視覚的イメージを通して、東京における西洋文化の初期受容のあり方を浮き彫りにしているのだ。そのイメージを如実にあらわしているのが、小説冒頭に描写された明治初期の銅版画「築地居留地の図」である。本多子爵はガラスの陳列棚に飾られた、古ぼけた版画を指してこう言う。「どうです、この銅版画は。築地居留地の図 ですか。図取りがなかなか巧妙ぢやありませんか。その上明暗も相当に面白く出来てゐるやうです。」そしてこの版画は語り

手「私」の目を通して次のように描かれる。

「雲母きんらのような波を刻んでいる東京湾、いろいろな旗を翻した蒸気船、往来を歩いていく西洋の男女のすがた、それから洋館の空に枝をのばしてある、広重めいた松の立木、そこには取材と手法とに共通した、一種の和洋折衷が、明治初期の芸術に特有な、美しい調和を示してゐた。この調和はそれ以来、永久に我々の芸術から失はれた。いや、我々が生活する東京からも失はれた。」この作品の初出は「中外」1919年（大正8年）2月1日であるから、執筆時から見て40年ほど遡る時代をさしている。

居留地を描いたというこの銅版画にモデルはあるのだろうか。この絵に注目した浅野洋⁶⁾は、明確なモデルはなく、芥川の創作であろうと考える。ところで日本における西洋銅版画の移入ということになると、司馬江漢（1747-1818）の作品が有名である⁷⁾。この作品に司馬江漢の名前は出て来ないが、芥川の別の未定稿には同じような文脈でその名前が登場する。「この話のあつたのは、明治12-13年 東京の町には開化の日が照ると同時に、やはり旧弊の泥濘の多かつた、丁度あの時代の事でした。と云ふよりも或は、司馬江漢の銅版画にでもありさうな、日本の空気と西洋の光線との不思議な位きはどい調和が、風俗のうえにも建築の上にも、反映してゐた時代と云つた方が、実に適当かもしれません。当時まだ私は洋学と漢学と、どちらも中途半端な教育を、しかも駆け足で通り抜けた二十代の青年でしたが、それでも父と別懇だつた成島柳北先生の肝煎で、及ばずながら朝野新聞⁸⁾の編輯局へ毎日顔を出してゐました⁹⁾。」

これを読んで分かるように、芥川はけっして司馬江漢の銅版画を明治初期に位置づけるような時代錯誤を犯してはいたわけではない。江漢が制作した一連の版画が、日本と西洋の「きわどい調和」を達成していたことが問題なのであり、明治初期の都市風景にもそのような特徴が見られたと述べているのだ。じっさい、司馬江漢は早くから西洋絵画に関心を持ち、平賀源内に師事して自分で油絵を制作していたが、オランダのボイスが書いた『術芸全書』に啓発され、天明3年（1783）9月に日本最初の腐食銅版画を制作したと言われる。『術芸全書』はもともとシヨメルというフランス人の書いた書物に依っていて、そのシヨメルもまたさかのぼって『百科全書』から製作技法を借用している¹⁰⁾。また早い時期

に洋風画家として銅版術を修めた亜欧堂田善(1748-1822)がいる。とはいえ、江漢も田善も江戸末期の画家であって、明治維新のときにはすでに亡くなっているのだから、本多子爵が見た版画を制作したはずはない。また、明治以降、写真術が発達したせいで銅版画自体が一般に魅力をもたなくなったという事実もあり、築地居留地を描いた日本の銅版画は見つかっていない。ただ「日本の空気と西洋の光線」が調和した江漢の銅版画として、隅田川西岸の夜景を描いた左右反対の眼鏡絵のひとつ「中洲夕涼図」(天明4年、1784) また同じく隅田川を描いた「三囲之景図」「両国橋図」(いずれも天明7年、1787)を挙げておこう。これらの図は江戸名所としてすでに名高かったこの下町地区を遠近法にもとづいてパノラマ的にあらわしている。ちなみに、芥川は司馬江漢の絵を一枚所有していた。

日本の銅版画ではないが、アメリカの聖公会宣教師J.M.ガーディナーが明治27年(1894)に描いた銅版画「築地居留地鳥瞰図」(立教大学所蔵)は参考に値する。ガーディナーは建築家であり、立教学校の校長をつとめていた人物だ。けれどもこの鳥瞰図は居留地全体をパノラマふうに再現しているもので、芥川が描いているようなディテールを見つけるのは難しい。もう一つ考えられるのは、開化絵あるいは横浜絵と呼ばれる錦絵である。この分野では歌川派の芳虎や芳員をはじめ、多くの画家が異国人や鉄道、近代建築などを主題に取り上げた。三代歌川広重が描いた「東京三十六景」のうち、「明石ばし」(明石町資料室所蔵)では洋装の紳士と和服姿の町人が立ち混じり、また「シティ・オブ・エド号と築地ホテル館」(同)では作品に登場する「いろいろな旗を翻した蒸気船」が前景を占めている。さらに一曜斎国輝の「東京築地保互留館海岸庭前の図」(1968)には、和洋折衷の築地ホテルが描かれ、芥川のいう「広重めいた松の並木」も見える。語り手は目にしている銅版画について、そこには牡丹に唐獅子¹¹⁾を描いた相乗りの人力車や、芸者のガラス写真の時代を思わせるので、いっそう懐かしみを覚える、と相づちをうつ。

次に本多子爵は隣に展示された大蘇(月岡)芳年(1839-1892)¹²⁾の浮世絵に視線を移し、そこに描かれた洋装の菊五郎と銀杏返しの半四郎の愁嘆場に語り手の注意を促す。そして「あの江戸とも東京ともつかない、夜と昼を一つにしたやうな時代が、ありありと目に浮かんでくるやうぞ

やありませんか」とコメントする。この濡れ場がどの歌舞伎演目にあたるのか同定するにたる材料はないが、五代目尾上菊五郎（1844-1903）、女形の半四郎が得意としたいわゆる「ざんぎりもの」、つまり明治開化期の風俗を映した世話物歌舞伎をさしていることは確かである。河竹黙阿弥（1816-1893）が脚本を書き、新富座などで上演された（「島衛月白浪」など）、芥川はこの二枚の絵を、いわば粹小説の額縁に置いて、これから始まる懐古談の舞台を限定している。

三浦のフランス風邸宅

三浦直記は25歳のときフランス留学から帰国した、「如何にも明治初期の文明が人間になつたやうな紳士」である。両親から莫大な遺産を相続した三浦が送るダンディの生活は、すべてがフランス趣味で統一されている。本多は三浦の部屋を次のように活写する。「向うの銅版画の一枚を見るやうに、その部屋の有様が歴々と眼の前に浮かんできます。大川に臨んだ仏蘭西窓、縁に金を入れた白い天井、赤いモロッコ皮の椅子や長椅子、壁に懸かつてあるナポレオン一世の肖像画、彫刻のある黒檀の大きな書棚、鏡のついた大理石の暖炉、それからその上に載つてある父親の遺愛の松の盆栽　すべてが或古い新しさを感じさせる、陰気な位けばけばしい、もう一つ形容すれば、どこか調子の狂つた楽器の音を思ひ出させる、やはりあの時代らしい書齋でした。」

そして本多は、三浦がナポレオン一世の肖像画の下で結城の着物を着てユゴーの『東方詩集』を読んでいる姿を描いて見せ、展覧会の銅版画のようだと言明する。ここにもまた、西洋と東洋の奇妙な混交のイメージがあらわれている。明治初期に留学から帰ったということ、ナポレオンの肖像画、ユゴーの名声などから考えると、三浦はおそらく第二帝政末期、1860年代後半にパリに滞在したのであろう。暖炉の上の盆栽、着物姿の三浦、いずれも「古い新しさ」「陰気なけばけばしさ」という撞着語法でしか表現できないような危うい調和なのだ。『東方詩集』（1829）はロマン派詩人であるユゴーが、ギリシア独立戦争に触発されて、オリエントに詩の発想を求めた作品である。重要なのは芥川がこのようなイメージを浅野洋が言うように「美意識の投影」¹³⁾として表層的に描いたのではなく、物語の構造を背後から支える隠喩構造として配置していることだ。つまり、洋行帰りの貴公子が送る幸福そうな新婚生活

の背後には、恐ろしい心の懊悩が秘められていて、それはまさに表面だけ西洋化した近代日本のかかえる深い亀裂を指し示しているのである。三浦直記は社会に積極的に参加したり人生を享受するタイプではない。ユイスマンスの『さかしま』の主人公デ・ゼッサントのように病気と現実世界への幻滅ゆえに、自宅に引きこもり、読書に明け暮れる内向型の性格なのである。

勝美の肖像

「学者肌」で、日頃「^{アムール}愛のない結婚はしない」と公言していた三浦が選んだ女性、藤井勝美はどのような人物なのか。語り手の本多は、三浦からの手紙で、勝美とは柳島の萩寺（現在の亀戸近辺）で知り合ったこと、「五姓田芳梅¹⁴⁾」画伯に妻の肖像画を描いてもらったことを知る。それは「束髪に結った勝美夫人が毛金の^{ぬいとり}繻のある黒の模様で、薔薇の花束を手にしながら、姿見の前に立つてあるところを、^{プロフィール}横顔に描いたもの」だったという。この描写は夫人の本質をよく伝えている。つまりフランス風の肖像画で、鏡を前にしているということは、華美と虚栄を象徴しているのだ。鏡の前にたたずむ娼婦（あるいは女優）を描いたマネの「ナナ」が1877年、やはり鏡を前にしたナダールによるグレフェール夫人の肖像写真が1896年であることを考えると、1870年頃に想定される勝美の肖像画は日本としては非常に早い洋風画の例である。束髪は日本では鹿鳴館時代（明治15年以降）流行した¹⁵⁾ものであるから、これも例外的に早いものだ。

本多が初めて勝美に会ったときの印象は次のように書かれている。「眉の濃い、血色の鮮な丸顔で、その晩は古代蝶鳥の模様か何かに繻珍の帯をしめたのが、当時の言を使つて形容すれば、如何にも高等な感じを与へてみました。（……）細君の潑刺たる才気は、すっかり私を敬服させてしまひました。俗に打てば響くといふのは、恐らくあんな対応の仕振りの事を指すのでせう。」つまり勝美という名前が示すように、才気煥発のサロン主宰者のような女性なのである。本多は思わず勝美に、「奥さん。あなたのやうな方は実際日本より、仏蘭西にでも御生まれになればよかつたのです」とまで言う。それは「舞踏会」においてロティ本人とされる軍人が、明子に向かって、あなたならフランスのどのサロンでも立派に迎えられます、と言った言葉に似ている。勝美も明子も、

前者が澁刺とした才気により、後者が未完成ながら洗練された物腰により、という違いはあっても、明治初期に移植されたフランス文化を体現する一種の突然変異体なのだ。しかも勝美の場合、西欧化現象は表面的な美や趣味にとどまらず、進歩的な道德観にまで及んでいる。すなわち旧弊な倫理観の欠如、「解放された女」のもつ自信である。

隅田川的情景

本多はある晩柳橋の料亭で新聞記者から聞いた楳山夫人と勝美のゴンップに衝撃を受け、それを三浦に問いただそうとする。この最後の場面が大川つまり隅田川にこぎ出した猪牙舟で展開する。明治初期の東京名所として名高い隅田川を舞台に選んだのは、理由がある。1908年暮れから数年間続いた木下杢太郎、北原白秋らの「パンの会」では、隅田川をセーヌ川に見立てて、その界限にある「メゾン鴻の巣」などの洋食屋に集っていたが、明治末期から大正にかけて、この一帯は荷風、鷗外など西洋帰りの、あるいは西洋志向の文学者・知識人の鍾愛する場所であった。新東京の欧風文化を体現するとともに、江戸の情緒を残していたからであろう。西洋人が浮世絵などに美を発見した「ジャポニスム」の目を借りて、彼らは独特の「異国情緒」をそこに見出したのである。

芥川もまた例外ではなかった。「開化の良人」のクライマックスとも言える川舟の場面では、水の風景が物語の悲劇的展開と密接に結びついている。作品の中で本多はこう回想する。「あの頃の大川の夕景色は、たとい昔の風流には及ばなかつたかも知れませんが、それでも猶、どこか浮世絵じみた美しさが残つてゐたものです。現にその日も万八の下を大川筋に出てみますと、大きく墨をなすつたやうな両国橋の欄干が、仲秋のかすかな夕明かりを揺らめかしてゐる川波の空に、一反り反つた一文字を黒々とひき渡して、その上を通る車馬の影が、早くも水霧すいあいにぼやけた中には、目まぐるしく行き交ふ提灯ばかりが、もう鬼灯程ほおずきの小ささに点々と赤く動いてゐました。」二人はこの景色に感銘を受け、「旧弊な」美も捨てたものではないと感じる。そして三浦は文明開化への疑念を口にするのだが、もちろんそこには「開化な細君」勝美夫人の奔放な行動への不信が込められていた。

三浦が一時的に妻の行動を容認する気になったと言うとき、隅田川の風景は黒一色になる。「空はまるで黒幕でも垂らしたやうに、椎の樹松

浦の屋敷¹⁶⁾の上へ陰々と蔽^{おお}ひかゝつたまま、月の出らしい雲のけはひも未だに少しも見せません。」三浦は続けて、勝美が従弟と称する男と不倫関係にあるばかりでなく、楢山夫人やほかの男とも関係している証拠を握るに至り、離縁を決意したと語る。このとき舟から見た風景は奇怪なものだ。「丁度向ふ河岸の並倉の上には、もの凄いやうに赤い十六夜の月が、始めて大きく上り始めました。」まるで血しぶきを上げる三浦の心のように、不吉な真っ赤な月が突如としてあらわれるのだ。あきらかに芥川龍之介は、隅田川の風景を、最初は静かな美しい江戸ふうのイメージから、暗黒の空を通して、最後は幻想的で凄惨なイメージへと変化させることによって、三浦直記の心の動きを視覚的に表現している。この隅田川情景は、「パンの会」の詩人たちが酔いしれた美の世界と遠く隔たっている。芥川は、そこに開化期の裏面、つまり女性解放に名を借りた不道德の跋扈を見ているのだから。「美が勝利する」という名前をもつ勝美の奔放な精神の前では、三浦のような誠実な愛は敗退する運命にある。文明の開化はしばしばよき道德の喪失と表裏一体であるというジレンマを芥川は見事な視覚的表象で描き出したのである。

芥川には「大川の水」(大正3年発表)という初期の随筆がある。少年時代から大川¹⁷⁾を眺めて暮らした芥川は、その水に対して、ほとんど肉感的な愛情を注いでおり、非常に官能的な文体で大川の自然情緒をうたい上げている。三好行雄¹⁸⁾や芳賀徹¹⁹⁾が指摘するように、大川は芥川の感受性の原点に位置していると言える。芥川は市外や地方からやってきて東京を愛した作家たちとは異なり、生粋の東京人であった。「もし自分に「東京」のにおいを問う人があるならば、自分は大川の水のにおいと答えるのに何の躊躇もしないであろう。独りにおのみではない。大川の水の色、大川の水のひびきは、我愛する「東京」の色であり、声でなければならぬ。自分は大川あるが故に「東京」を愛し、「東京」あるが故に、生活を愛するのである。」

だから芥川を引きつけたのは江戸情緒を残しながらも近代都市への脱皮を急ぐ東京の錯雑した風景であったと思われる。未定稿「東京を愛する」には、東京の明治文化に対する郷愁を表明した箇所がある。「今の僕にとって最も追憶と思慕との情を起させるものは 元禄にあらずして明治です。江戸にあらずして東京です。殊に明治十四五年の東京——あ

の“お菊夫人”の著者が富士山と歌麿との国の土を踏んだ、其頃の東京、其頃の時代です。柳北と魯文と黙阿弥との時代、半四郎と田之助との時代、芳年と狂斎との時代です。「こうした連想によって、一木の並樹、一片の鰐石にも感情を移入する事の出来るのは都会に生まれて都会に育った僕たちの特権です。」²⁰⁾

明治 14-15 年とは、鹿鳴館時代に先立つ開化の時期である。芥川の生まれが明治 25 年であることを考えると、「この時代に追憶と思慕を感じる」という表現は、けっして子供時代の思い出に固執していることではなく、明治開化期という「他者」の世界への知的・美学的な強い関心をもっていることを示している。

芥川においては、大川はセーヌ川ばかりでなくヴェネツィア風景にもたとえられている。「大川の流れを見る毎に、自分は、あの僧院の鐘の音と、鶺鴒の声とに暮れていく伊太利亜の水の都　バルコンにさく薔薇も百合も、水底に沈んだやうな月の光に青ざめて、黒い柩に似たゴンドラが、其中を橋から橋へ、夢のように漕いでゆく、ヴェネチアの風物に、溢るるばかりの熱情を注いだダンヌンチヨ²¹⁾の心持ちを、今更のように慕わしく、思ひ出さずにはみられないのである。」(「大川の水」)ゴンドラを柩にたとえている比喩は、おそらくアンデルセンの森鷗外訳『即興詩人』(原作 1834、翻訳は 1892 年から 1901 年にかけて「めさまし草」に連載)から借用したのであろう。アンデルセンの作品では、「水の都」と題された章のなかで、次のように述べられているからだ。「われは始めて「ゴンドラ」といふ小舟を見き。皆黒塗にして、その形狭く長く、波を截りて走ること弦を離れし箭に似たり。暈りて視れば、中央なる舟房にも黒き布を覆へり。水の上なる柩とやいふべき。」

永井荷風がアメリカ、フランスの留学から帰って著した東京散策の書『日和下駄』(1914-15)を読むと、急速な近代化によって東京の町がかつての美を失いつつある様子がよく分かる。荷風はその第六章「水」において、江戸時代的美観を形作っていた水流が、審美眼のない建設業者の護岸工事のせいでいかに魅力を失ってしまったかを嘆いている。それでも荷風は、木下空太郎、北原白秋らが築地の居留地から月島永代橋にかけて感興を覚えて詩を作った例をあげて、隅田川河口に残る文学的情景を称えている。

芥川の非凡な点は、このような隅田川情緒の文学の伝統によりながら、

新時代の社会が道徳の荒廃をもたらした側面を三浦というフランス仕込みのダンディの哀れな運命に託して描いたことにある。「開化の良人」は、本多子爵が語り終えたとき、博物館の閉館の時刻となり、二人が帰っていく場面で終わる。「子爵と私とは徐に立上がつて、もう一度周囲の浮世絵と銅版画とを見渡してから、そつとこの薄暗い陳列室の外へ出た。まるで我々自身も、あの硝子戸棚から浮かび出た過去の幽霊が何かのやうに。」なぜ過去の幽霊なのか。それは、三浦の物語に魅入られ、明治開化期の光と陰への強い郷愁に駆られた二人にとって、博物館外部の現実世界がむしろ虚構に見えてきたからである。

むすび

「開化の殺人」「開化の良人」に描かれた文明開化期のイメージの中心には、大川と呼ばれた隅田川下流の風景があった。隅田川はかつて利根川水系の末流の一つであったが、近世以来の利根川東遷計画によって、荒川に接続されて、水都江戸の商業と交通をつかさどる中心水域を形成することになった。明治4年以来蒸気船が隅田川を拠点として各地をむすぶようになり、吾妻橋と永代橋を往復した隅田川丸のように、「一銭蒸気」と呼ばれる旅客船も名物となったのである。この時期の東京は、まさに西欧から直接さまざまな文化が押し寄せた時代であり、近代日本の異文化体験の原点を形作っている。

芥川は小品「舞踏会」（1920）において鹿鳴館の宴を活写している。作家はこの作品を書くにあたってピエール・ロティの『秋の日本』（1889）を参考にした。筆者は二人の作家の書き方の差異について考察したことがあり²²⁾、この作品には東京の情景そのものはほとんどあらわれていないので、ごく簡単に触れておくだけにしよう。1880年、井上馨が外務卿となり、先進欧米諸国と結んだ不平等な条約を改正するために、まず風俗習慣を西洋風に改める政策を採った。その端的な例が、ヨーロッパ式の社交場鹿鳴館であった²³⁾。1883年、現在の帝国ホテルに隣接した日比谷地区の約440坪という広大な敷地に、イギリス人建築技師ジョサイア・コンダーの設計で建てられたものだ。この迎賓館では園遊会や舞踏会が開かれ、政府高官とその夫人や令嬢が、外国人を接待した。男性はみな燕尾服、女性は緋の袴もしくは紋服白襟と定められていたが、

洋装も次第に増えていったようだ。こうして鹿鳴館はいわば文明開化の象徴となったのだが、もとを正せば形だけでも欧米に追いつきたいという明治政府の国策で作られたものであったから、当時からすでにこれを浅薄で滑稽な欧米模倣とする見方も多く、国粋主義者たちの攻撃の標的にもなった。結局 1887 年、井上馨が外務卿を辞すと、事実上鹿鳴館の時代は終わりを告げた。

芥川の『舞踏会』は、令嬢明子の目から見た夢のような鹿鳴館の様子を、パートナーをつとめた海軍将校ピエール・ロティの姿と共に美しく描き出したもので、三島由紀夫はこの作品を絶賛した。明治開化期特有の和洋折衷の世界を批判的なまなざしによるのではなく、はかない夢を見たある少女の記憶として描き出した。同じことは「雛」にさりげなく挟み込まれている、銀座煉瓦街を主人公の娘が人力車で見物する場面についても言える。文明開化は、芥川にとって美的な過去のひとつの主題系をなしていた。

付属資料

芥川龍之介文庫（日本近代文学館旧蔵書）洋書部
フランス文学関連書誌一覧

Abbé. *Legends of Saint Joseph, patron of the universal church*, New York, Kennedy, 1896.

Aldington, Richard. *Voltaire*, London, Routledge, 1925.

Amiel, Henri Frédéric. *Amiel's journal*, London, Macmillan, 1913.

Babbitt, Irving. *Rousseau and romanticism*, Boston, Miffrin, 1919.

Balzac, Honoré de. *Droll stories col. From the abbeys of Touraine*, London, Mathieson, n.d.

— *Lost illusions*, London, Dent, n.d. [Everyman's library]

— *The wild ass's skin*, London, Dent, 1915, [Everyman's library]

Barbey d'Aureville, J.A. *Vom Dandytum und von G.Brummel*, München, Müller, 1909.

Barbusse, Henri. *We others; stories of fate, love and pity*, New York, Dutton, c1918.

- Baudelaire, Charles.** *Baudelaire; his prose and poetry*, New York, Boni and Liveright, c1919.
- *The flowers of evil*, London, Mathews, 1909.
- *Werke*, Minden, Bruns. 3 Band *Poes Leben und Werke*, Wagner in Paris.
- Bergson, Henri,** *An introduction to metaphysics*, London, Macmillan, 1913.
- *Time and free will; an essay on the immediate data of consciousness*, London, Allen, 1912.
- Bernardin de Saint-Pierre.** *Paul and Virginia*, Philadelphia, Altemus, n.d.
- Bourget, Paul.** *Antigone and other portraits of women (voyageuses)*, New York, Scribner, 1898.
- Brandes, George.** *Anatole France*, London, Heinemann, 1908.
- Brunetière, Ferdinand.** *Honoré de Balzac*, London, Lippincott, 1906.
- Cladel, Judith,** *Rodin the man and his art with leaves from his note-book*, New York, Century, 1914.
- Claudé, Paul.** *The east I know*, New Haven, Yale Univ, 1914.
- *The Hostage; a drama*, New Haven, Yale Univ. 1917.
- *Tête-d'Or, a play in three acts*, New Haven, Yale Univ. 1919.
- Coppée, François.** *Ten tales*, New York, Harper, c1890.
- Daudet, Alphonse.** *La belle-nivernaise and other stories*, New York, Crowell, c1895.
- *The novels and romances*, Boston, Little, c1900. 2vols.
- Diderot, Denis.** *Diderot's early philosophical works*, Chicago, Open Court, 1916.
- Flammarion, Camille.** *Death and its mystery at the moment of death; manifestations and apparitions of the dying; "doubles", phenomena of occultism*, London, Unwin, 1922.
- *Death and its mystery before death; proofs of the existence of the soul*, New York, Century, 1921.
- *The unknown*. London, Harper, 1900.
- Flaubert, Gustave,** *Madame Bovary*, London, Heinemann, 1902.
- *Salambo*, London, Richards, 1901.
- *The temptations of St. Anthony*, New York, Harriman, 1911.
- France, Anatole.** *Count Morin deputy*, London, Lane, 1921.
- *The crime of Sylvestre Bonnard*, London, Lane, 1915.
- *Marguerite*, London, Lane, 1921.
- *Opinions*, New York, 1922.
- *Penguin island*, London, Lane, 1919.

- *Works of Anatole France*, London, Lane :
- The amethyst ring*, 1920.
- The aspirations of Jean Servien*, 1912.
- At the sign of the Reine Pédauque*, 1912.
- Balthasar*, 1909.
- The bridge of Corinth and other poems and plays*, 1920.
- Clio*, 1922.
- Crainquebille putois, riquet and other profitable tales*, 1915.
- The elm-tree on the mall; a chronicle of our own times*, 1910.
- The garden of Epicurus*, 1908.
- The gods are athirst*, 1921.
- Jocasta and the famishes cat*, 1912.
- The Latin genius*, 1924.
- The merry tales of Jacques Tournebroche and child life in town and country*, 1910.
- Monsieur Bergeret in Paris*, 1921.
- Mother of pearl*, 1908.
- A mummer's tale*, 1921.
- On life and letters*, 1st ser. 1911.
- On life and letters*, 2nd ser. 1914.
- On life and letters*, 3rd ser. 1922.
- On life and letters*, 4th ser. 1924.
- The opinions of Jérôme Coignard*, 1913.
- The path of glory*, 1916.
- The red lily*, 1908.
- The revolt of the angels*, 1914.
- Thaïs*, 1909.
- The well of Saint Clare*, 1909.
- The white stone*, 1910.
- The wicker work woman; a chronicle of our own times*, 1910.
- Anatole France, the man and his work; an essay in critical biography* by James Lewis May, 1924.
- Conversations with Anatole France* by Nicolas Ségur, 1926.
- Gaboriau, Emile.** *Monsieur Lecoq*. London, hodder, n.d.
- Gauguin, Paul.** *Noa noa*, Berlin, Cassirer, n.d.
- Gautier, Théophile.** *Romances*, Boston, Little.
- Vol. 1-2 *Mademoiselle de Maupin*, 1912.
- Vol. 3 *The romance of a mummy*, 1912.

- Vol. 4 *Fortunio. – One of Cleopatra's nights. – King Cndaules.* 1912.
- Vol. 5 *Spirite. – The Vampire. – Aeria Marcella.* 1912.
- Vol. 6 *The Quarette, Militona and other stories.* 1912.
- Vol. 7 *Avatar. – Jettatura. – The water pavilion.* 1912.
- Vol. 10 *Jack and Jill and other stories.* 1912.
- Gobineau, Joseph Arthur.** *The Renaissance; Savonarola – Cesare Borgia – Julius II – Leo X – Michael Angelo,* London, Heinemann, 1913.
- Goncourt, Jules and Edmond de.** *Renée Mauperin,* London, Heinemann, 1902.
- Gourmont, Remy de.** *A night in the Luxembourg,* London, Swift, 1912.
- Halévy, Daniel.** *The life of Friedrich Nietzsche,* London, Unwin, 1914.
- Hervieu, Paul.** *The trail of the torch; a play in 4 acts,* New York, Doubleday, 1915.
- Hugo, Victor.** *Dramatic works,* London, Belle, 1913.
— *Selections from poetical works,* New York, Crowell, n.d.
- Jammes, Francis.** *Romances of the rabbit,* New York, Brown, 1920.
- Laclos, Choderlos de.** *Liaisons dangereuses.* Berlin, Fischer, n.d.
- Leblanc, Maurice.** *The golden triangle,* London, Hurst, n.d.
- Lévi, Eliphaz.** *The history of magic including a clear and precise exposition of its procedure, its rites and its mysteries,* London, Rider 1922.
- Loti, Pierre.** *Madame Chrysantheme,* Chicago, Donohue, c1892.
- Louÿs, Pierre.** *Aphrodite; a novel of ancient manners.* Paris, Carrington, 1906.
— *Woman and puppet etc.* London, Greening, 1908.
- Macklin, Alys Eyre.** *Twenty-nine tales from the French,* New York, Harcourt, c1922.
- Maeterlinck, Maurice.** *Aglaveine and Selysette,* London, Allen, 1904.
— *The intruder; a play.* London, Gowans, 1913.
— *Joyzelle,* London, Allen, 1907.
— *Monna Vanna; a drama in three acts,* London., Allen, 1910.
— *Pelleas and Melisanda and the sightless two plays,* London, Walter Scott, n.d.
— *Prinzessin Maleine,* Leipzig, Diederichs, 1912.
— *Sister Beatrice and Ardiate & Barbe bleue; two plays,* London, Allen, 1909.
— *Wisdom and Destiny,* London, Allen, 1912.
- Margaret, Queen of Navarre,** Trenor, c1902.
- Marie de France.** *French mediaeval romances from the lays of Marie de France,* London, Dent, n.d.

- Mauclair, Camille.** *Auguste Rodin; the man – his ideas – his works*, London, Duckworth, 1909.
- Maupassant, Guy de.** *Works*. New York, Bigelow, c1909.
- Vol. 1 *Boule de suif, and other stories*.
- Vol. 2 *Monsieur Parent, and other stories*.
- Vol. 3 *The viaticum, and other stories*.
- Vol. 4 *The old maid, and other stories*.
- Vol. 5 *Une vie, and other stories*.
- Vol. 6 *Bel ami*.
- Vol. 7 *Mont Oriol, and other stories*.
- Vol. 8 *Pierre et Jean, and other stories*.
- Vol. 9 *Fort comme la mort, and other stories*.
- Vol. 10 *Notre cœur, and other stories*.
- Maynial, Edouard.** *Casanova and his time*, London, Chapman, 1911.
- Merejkowski, Dmitri.** *The life-work of Flaubert*, London, Morning, n.d.
- Mérimée, Prosper.** *Ausgewählte Novellen*, München, Müller, 1908.
- Molière.** *Plays*, Boston, Little.
- Vol. 1 *The Misanthrope. – Le bourgeois gentilhomme*, 1912.
- Vol. 2 *Tartuffe. – Les précieuses ridicules. – Georges Dandin*. 1917.
- Vol. 3 *Les femmes savantes. – Le Malade imaginaire*, 1895.
- Vol. 4 *L'avare. – Don Juan. – Les fâcheux*. 1919.
- Vol. 5 *L'école des Femmes. – L'école des maris. – Monsieur de Pourceaugnac*, 1919.
- Vol. 6 *L'étourdi. – Le mariage forcé. – Le médecin malgré lui. – La critique de l'école des femmes*, 1897.
- Montaigne, Michel de.** *Essays*, London, Bell, 1892, 3 vols.
- Nicolson, Harold.** *Paul Verlaine*. Boston, Mifflin, 1921.
- Pascal, Blaise.** *Selected thoughts*, London, Walter Scott, n.d.
- Pellissier, Georges.** *The literary movement in France during the nineteenth century*, New York, Putnam, c1897.
- Renan, Ernest.** *Antichrist*, London, Walter Scott, [intro. 1899].
- Rolland, Romain.** *Above the battle*, London, Allen, 1917.
- Rousseau, Jean-Jacques.** *Confessions*, New York, Knopf, 1923, 2 vols.
- Sainte-Beuve, C. A.** *Causeries du Lundi*, vols. 1,2, 5-7, London, Routledge, n.d.
- Shanks, Lewis Piaget.** *Anatole France*, Chicago, Open Court, 1919.
- Sherard, Robert Harborough.** *The life, work and evil fate of Guy de Maupassant*. London, Laurie, 1926.

- *Modern Paris; some sidelights on its inner life*, London, Laurie, n.d.
- Stendhal**. *On Love*, London, Duckworth, 1915.
- Taine, H. A.** *History of English literature*, London, Chatto, 1920, 4 vols.
- Tallentyre, S. G.** *The friends of Voltaire*. London, Smith, 1906.
- Trollope, Henry M.** *The Life of Molière*, London, Unwin, 1909.
- Verhaeren, Emile.** *The dawn (Les aubes)*, London, Duckworth, 1910.
- *Love poems*, London, Constable, 1916.
- *Plays*, London, Constable, 1916.
- *Rembrandt*. Übertragung von Stefan Zweig, Leipzig, Insel, 1912.
- *ibid.* 1920.
- Villiers de L'Isle-Adam, P. A.** *The revolt and the escape*, London, Duckworth, 1910.
- Villon, François.** *Poems*, New York, Boni and Liveright, n.d.
- Vizetelly, Ernest Alfred.** *Emile Zola, novelist and reformer; an account of his life and work*, London, Lane, 1904.
- Voltaire.** *Candid*, New York, Boni and Liveright, c1918.
- Zola, Emile.** *The ladies' paradise*, London, Hutchinson, n.d.

Title

- Aucassain & Nicolette and other mediaeval romances and legends*, London, Dent, 1912.
- French belles-lettres, from 1640 to 1870, Scarron – Volney – Mérimée – Flaubert – Lamartine*, New York, Dunne, c1901.
- French wit and humor*. Philadelphia, Jacobs, 1902.
- Old French romances*, London, Allen, 1914.
- Plays from Molière by English dramatists*, London, Routledge, 1885.

注

- 1) 1920年の統計では人口217万、ただし1923年の関東大震災で150万人が家を失った。
- 2) 『近代文化の原点 築地居留地』築地居留地研究会、亜紀書房、第一巻2000年、第二巻2002年。また次の書も参考になる。『開化の東京を探検する』東京都江戸東京博物館監修、江戸東京歴史探検第4巻、2003年。
- 3) 築地ホテルは明治5年に起きた銀座の大火事で焼失した。
- 4) 青山学院大学、明治学院大学、立教大学、双葉学園などキリスト教系の学校の多くがこの場所に発祥した。
- 5) その期日は明治12年6月12日「ドイツ皇孫殿下」が新富座で芝居見物

をした当日とされている。

- 6) 浅野洋「開化へのまなざし <画>あるいは額縁の文法」『国文学』特集「芥川龍之介 小説の読みはどう変わるか」學燈社 1996年4月号、pp.42-48。
- 7) 司馬江漢については、以下の書を参照のこと。『司馬江漢全集』全4巻、八坂書房、1992-1994；成瀬不二雄『司馬江漢』集英社、日本美術絵画全集第25巻、1974；朝倉他編『司馬江漢の研究』八坂書房、1994。
- 8) 明治7年に創刊された新聞。東京江戸博物館に同社屋の明治10年代の模型がある。
- 9) 『芥川全集』第6巻、pp.19-30。
- 10) 菅野陽「司馬江漢の銅版画技法の原点について」、朝倉治彦ほか編『司馬江漢の研究』八坂書房、1994、pp.288-294。また西洋画の導入はさらにかかのぼり、小野田直武に代表される秋田蘭画の眼鏡絵に端を発している。
- 11) 人力車の外部に牡丹や自雷也、金時などを描いた黒漆塗りのタイプは、銀座四丁目に店を開いていた秋葉大助の創案になるという（『江戸東京学事典』三省堂 2003年、p.378）。
- 12) 月岡芳年は浮世絵師雲斎の用紙で、国芳の弟子。洋画から新しい要素を取り入れて、歴史画や美人画、新聞挿絵などに新境地を開いた。
- 13) 前掲論文、p.48。
- 14) 実在の画家で和洋折衷様式で知られた五姓田芳柳（1827-1897）に似せた名前。（『芥川全集』第4巻注による）。
- 15) 『江戸東京学事典』p.472。
- 16) 当時本所区横網町にあった肥前守松浦侯の屋敷で、水路の目印となる椎の大木があった。
- 17) 正確には、隅田川の下流で吾妻橋以南の部分で土地の人は「大川」と呼んでいた。永井荷風『隅田川』（1909）北原白秋『思ひ出』（1911）のこの作品への影響に関しては、長沼光彦「大川の水」（『国文学解釈と鑑賞』別冊「芥川龍之介 旅とふるさと」（至文堂 2001）を参照のこと。
- 18) 三好行雄『芥川龍之介論』、昭和51年、筑摩書房。初出は「現代のエスプリ」24号、昭和42年。
- 19) 芳賀徹「芥川龍之介と東京」、芥川生誕百年記念展カタログ『もうひとりの芥川龍之介』1992、産経新聞社。
- 20) 芥川「東京を愛する」、全集22巻、pp.385-386。本文は分かち書きだが、読みやすいようにあらためた。
- 21) イタリアの作家ガブリエレ・ダヌンチオ（1863-1938）、ヴェネツィアを舞台とした作品に『火』（*Il fuoco*）がある。芥川はこれを英訳 *The flame of life*（1900）で所有していた。この本には芥川自身による書き込みがあり、熟読したことが分かる。

- 22) 拙論「ある文明開化のまなざし 芥川龍之介『舞踏会』とピエール・ロティ」『仏文研究』(京都大学フランス語学フランス文学研究会) 29号、pp. 119-128, 1998年。
- 23) 鹿鳴館については、次の書を参照のこと。海老井英次『開化・恋愛・東京 漱石・龍之介』おうふう、2001年。

(京都大学大学院文学研究科教授)